を知り得べく、若し古川鐵道院副総裁が御先導の任に當りたる時はフ若しくはフルと書きて其上部に一線を引き、又野村東部管理局長なる時はノの上部に一線を引きて省略語なる事を示し置かば何の苦もなく譯讀する事が出來ます。而して又「ブ」の上部に一線を引きたるあとに「玉歩を運ばせ給ひ」とあれば前の省略語は「プラットホーム」なる事を知り得るでありませう。尙ほ「ブ軍は今や將に土都コに肉迫せんとしつゝあり」と綴りて「ブ」及び「こ」の上部に省略線を引き置けば「ブ」は「勃牙利亞」にして「コ」は「君斯丹丁堡」なる事何人にも直ちに推知し得るであらう。又「米國首都……ワ」は「華盛頓」「大藏大臣……タ」は「高橋是清男」、「式部長官……ト」は「戸田氏共氏」なる事深き考慮を要せずして知る事が出來るであらう。此くの如き方法に依りて省略し得る語は頗る饒多であります、尙ほ一演說一講話中には自已が未だ知らざる名詞、又は知れる名詞にして幾度も用ゐらるゝ事があります、斯くの如き場合にも亦一々其全部を速記するの必要なく、最初の中一二回當該語の全部を書き、其後に發せられたる同一語は之れを省略法に依りて初頭の

一二音を書きて其上部に一線を引き置けば充分でありまして飜譯を誤る樣な事はありませぬ、之れに依つて是れを觀るも速記の巧拙が指手の硬軟に關係する事少くして腦力の强弱、推理判斷力の鈍敏、學識の深淺如何に係る所如何に甚大なるかを知る事が出來るでありませう。

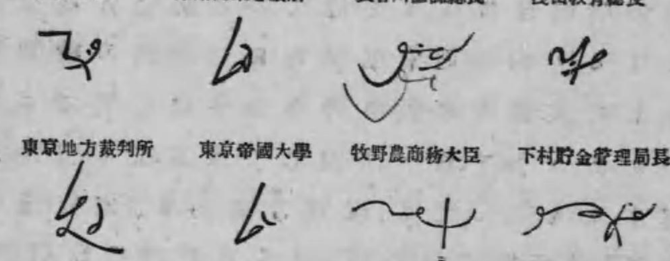
第二　固定名詞省畧法

如上の省略法に依りて總ての名詞を省略し得るとするも尙ほ固有名詞中には初頭の數語を同ふして其後伴の數語乃至數十語を異にするものがあります、假へば同じく東京なる冒頭語を有するものにても「東京帝國大學」「東京商業會議所」「東京株式取引所」「東京米穀商品取引所」等ありて、其初頭の一二音のみを記したるのみにては其後伴が何れなりしかを推斷するに苦しみ誤譯する事が往々あります、故に之れが誤譯を防ぐ爲め其同うする初頭の數語を速記文字にて連綴したる後其綴字の右肩に後伴語中の一二音を書き又たは交叉して記臆を喚起する資料目標と致します、即ち此方法をば固定名

詞省略法といふのであります、假へば「高等師範學校」は「コートー」の右肩に「シ」を、「高等工業學校」は「コートー」の右肩に「コーギ。ー」を、「高等工藝學校」は同じく「コーグー」を書き、「楠瀬陸軍大臣」は「クツノセ」に簡字の「大臣」を交叉し、「下岡農務局長」は「シモオカ」の右肩に「ノー」を添書するが如きものであります。

應用例

桂侍從長　東京商業會議所　長谷川參謀總長　淺田教育總長



東京地方裁判所　東京帝國大學　牧野農商務大臣　下村貯金管理局長

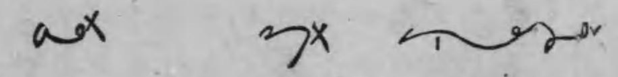
右肩に添書すべき文字は後伴語中に於て自己が飜譯の際記憶を喚起するに好適なりと認めたるものを用ゐれば宜しいのであります。

第三　成語省畧法

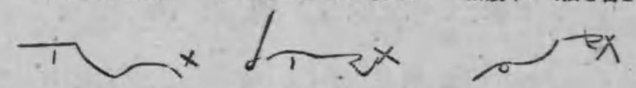
成語とは「果して然らば」「豈圖らんや」「未だ曾て」「之れに依つて是れを見れば」等の熟語若しくは諺語及格言に於ける「鷸蚌の爭ひは漁夫の利となる」「一犬虛に吠ゆて萬犬實を傳ふ」「蓼食ふ虫も嗜きぶすき」「螳螂の斧を揮つて龍車に向ふ」等の如く一個の語を成せるものを言ふのでありまして斯くの如く平常慣用せられつゝある成語は之れ亦全部書くの必要がありませぬ、而して這は前者固定名詞の如く前半の數語を同うして後半の數語を異にするが如き類似のものがありませぬから一定の符標を用ゐて省略する事と致します、其略符標は固定簡字の「挾む」と同一でありまして或成語の前半を普通に連綴したるのち後半數語の代りに成語省略符標を用ふるのであります、今其一班を示せば次の如くである。

應用例

豈圖らんや　未だ曾て　思ふ念力岩をも透す



弘法も筆の誤り　天網恢々疎にして漏さず　窮鼠却つて猫を嚙む

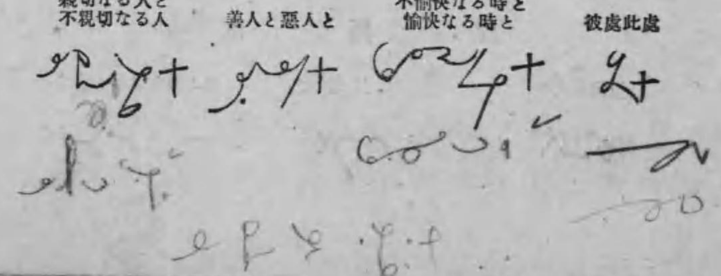


第四　反語省略法

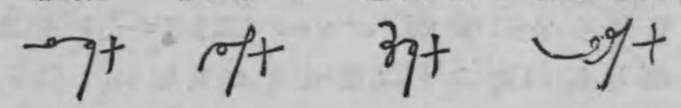
反語とは前半語と後半語とが反對の意義を有するもの假へば「孝行者と不行者」「智者と愚者」「親切なる人と不親切なる人」「彼處此處」「あれやこれや」等を謂ふのでありまして是等も亦全部速記するの必要はありませぬ、即ち前半語だけを書きて後半の反語は之れを省略符標を以つて代表せしむるのであります、而して其省略符標は成語省略符標と區別する爲め漢數字の「十」を使用致します。

應用例

親切なる人と不親切なる人　善人と惡人と　不愉快なる時と愉快なる時と　彼處此處



君と僕と　行くと歸へると　進むと退くと　熱心と不熱心と



五　序次語省略法

序次語とは「第一、第二、第三、第四」「大正一年、二年、三年、四年、五年」「一ッ二ッ三ッ」「一人二人三人」等の如く同一種類の語の順序を追ふて連ね發せらるゝものを云ふのでありまして之れを省略する方法をば序次語省略法といふのであります、即ち斯く同一種類の語を連ね用ゐられたる時は初頭の一語のみを書きて他は連發せられたる數だけの点を併記するか又は數字のみを書きて代表せしむるのである、假へば「明治四十二年、三年、四年、五年と經て」といふ場合には「メージ四十二ネン、、、」と点を三個書きて三年、四年、五年を代表せしむるのであります、而して又連發されたる語が序次的ならざる場合若しくは中間に他の品詞の存在する時には其連發されたるだけの數字を併書し置くを得策と致します

假へば「勅令第二十五號並に第二十六號を以て公布せらる」は前の「チョクレーダイ二十五ゴー」を普通に連綴し、後の「第二十六號」は唯だ數字にて「26」とのみ書いて置けば宜しいのであります。

(三)　綴文示例

下に掲げたる綴文例は有賀博士が最近三年間の外交事情に就て述べられたる演説の一節である。

土耳古は昔から西歐羅巴の國々の如く憲法を作つて自由の國になりたいといふ志を以つて

居りました多くは西歐羅巴に出て教育を受けた若い者共がさういふ事を唱へて居ります

故に其黨派を青年土耳古黨と申します無論其中に老翁もあるが若いものが多く居るから

そう稱へて居ります而して前の土耳古帝ハミダラ・ハミツトは常に間諜政略を用ゐて

ハミダラハミツト

欠

欠

其數饒多ではありませぬから速記力上には左して大なる影響は及ぼしませぬ。

尙ほ政談、敎育、宗敎、實業其他に關する演說、講話及び講談、落語お伽噺若しくは諸種の會議等は個々別々に其形式、用語を異にするものなれば綴文並に飜譯の練習を爲すと同時に之等の形式、用語を記臆し練習するの必要があります、故に修學者は各自可及的其練習資料を蒐集して以て各方面に於ける速記に堪へ得るの素地を養ひ他日實地速記に望んで萬遺憾なきを期せねばなりませぬ。

第二十五章　今後の練習

研究者諸君、諸君は余が總說に於て述べたる堅忍不拔の勇猛心と不撓不屈の努力とを以て最後の大成を期せざる可からずてふ數語を深く腦に銘せられ數十章數十節に亘りて縷々講明したる一切の法則を會得せられ之れが百練千磨の功を積みて以て最後の月桂冠を獲得せられんとしつゝある頼母しき我黨の優勝者なる事を喜び心私かに欣喜雀躍の感に堪へないのであります、必らずや諸君が從來の研纂と練磨とは克く普通の速記に堪へ得るの技能を堅立せられたるものと深く信じ幸先多き前途を祝福して措く能はざるものであります、已に業に斯くの如く萬難不動、研策精勵して止まざる所の立派なる精神を有する諸君に對して更らに說を爲すは釋迦に說法の譏りあるを免れますまい、然れども是又教授者の立場よりして己むを得ざる所である、故に余は講の終らんとする自修に當り(一)通信教授と直接教授の優劣及び自修者の今後に處する享受する利得、並に自修者

覺悟、(二)趣味の養成、(三)時間の愛惜、(四)同好朗讀會の必要、(五)普通學の修養の五綱目に付て絮說せんと欲するものであります。

速記獨修の成否如何に就ては斯學大家の間に於ても種々論議せられたる所なるが今や之れが解決を見るに至つたのである。世人の多くは早計にも速記獨修の不可能を絶叫して已まざる狀態でありますが是れ從來速記學が其の蘊奥を究めざる一部投機的商輩とも云ふべき所謂阿世曲學者流に依つて社會に紹介せられ其教ふる速記文字の複雜多劃晦澁拮掘なりしと講述に一片の誠意無く唯だ徒らに一通りの文字を羅列せる粗漏極まるものなりしが爲め修學者をして遂に其應用に困難を感じ速記とは實に取り止めも無き學術なりとの謬想(來面目なる通信教書なれども當然の見解)(從眞の見解)(之れ不の見解)を起さしめたるに職由するものにして速記獨習の可能、不可能といふ点より觀る時は素より重きを爲さずと雖も斯學の普及發展上より觀る時は眞に由々數問題にして吾人の返す々々も遺憾とする所であります、此点に就て自から斯學の泰斗を以て任じ人も亦許す速記專門家中に眞個赤誠を披

遲して之れが教授の衝に當る者の無かりし不親切、怠慢の罪は到底免るゝ事は出來ますまい、余は聲を大にして號叫せん現在斯學大家にして眞實後進者養成の任に當れるもの無きを、而して本講自修者中には嘸々笈を帝都に負ふて斯學大家の門を叩き親しく教導を仰ぎし者もあるでありませう、斯かる學生は余の言を俟たずとも必らずや其如何なるものなりしかを經驗せられたる事と思ふ、余は之等の諸君に借問せん現在の直接教授者中に一定の教科書に依りて秩序的に教授し居る者あるかを、之れに對して果して有りと答へ得るものがあるでありませうか、決して有りますまい、是れ無しとすれば开は散漫教授なりと斷定するより外ないのであります、即ち在來の直接教授は最初吾人の聲音言語の基礎たる直音、拗音、濁音、半濁音、撥音、促音各字並に連綴方法を教へたる後は演說、講義其他のものを朗讀して之れを傍記練習せしめ散漫的に思ひ出したる簡字を時々二三字位宛を教ふるに過ぎないのであります、茲に於てか文字並に其應用方法を教へらるゝのみならば果して多大の學費と時間とを費して以て直

接教授を受くるの必要ありや否やといふ問題は起り來るのであります、凡そ何の學術技藝たるとを問はず有形の物は有形の物を以て表示し得ざるといふ事はないのである、即ち速記文字は有形のものである有形なる以上は之れを有形の文字を以て教示し得ざる理由は何處に存するであらうか、斯くの如く事理明白なるにも拘はらず尙ほ且通信教授不可能を呼號して已まざる論者の心事を解するに頗る困難を感ずるのであります、是れ恐らく速記學が日本に移入せられて未だ日淺きを奇價措くべしとなし名を不可能に藉りて以て之れを傳授するに吝かなる僻念よりせる結果に外ならずと認むるのである、故に余は之等吝嗇漢に一喝を加へて其謬妄を打破すると同時に誠意誠心以て斯學の利便を社會人士の爲めに頒たんと欲する一念よりして眞摯之れが講述を爲し來つたのであります、夫れかあらぬか彼等吝嗇漢等は余が一切の所謂秘訣蘊奥なるものを露呈して通信講義の任に當るや切齒扼腕、余を目して速記界の攪乱者なりと漫罵せりとの消息を耳にしたのである、然れども公然余に向つて攻擊の矢

なみのすらす怒を目の忌猜に管して得ずを向け
りしは痛快の至りでありまして修學者と共に
幸慶とする所であります、余は以上の理由に依
つて通信教授可能有効なる事を深く信ずると
同時に講義錄に依りて自修する諸君は直接教
授を受くるものよりも多幸有利なりと言ふを
憚らんのであります、如何となれば余が二三の
師に就いて親しく教導を仰ぎて得たる智識よ
りも數種の獨習書に依つて取得したる智識の
効力莫大なりしは勿論今日あるに至つたのも
若獨習書の賜物である、而して現に自已が直接
教授を爲しつゝある經驗よりするも實際に於
て從來一定教科書の完備し居らざりしが爲め
其時其場合に臨みて必要の文字を教ふるに過
ぎなかつたのである、爲めに通學生に對して今
回本講に於て說述したる丈けの知識を傳授し
得ざりしを憾むのであるも、之れに比すれば諸君
は其幸福を喜ばねばなりますまい、先づ試みに
諸君が直接教授を受けたるものと假定せよ、其
場合多大の學費を要するは勿論風の夕雨の朝
若しくは嚴寒肩を劈くの日も盛夏流汗淋漓た
る時も厭はず日々通學して講義を聽聞筆せ

ねばなりますまい、然るに通信教授に依りて勉
學する時は僅少の學費を以て而も業務の傍ら
同等の智識を獲取し得るとすれば其幸福や其
利益や多く言ふを待たずして自から釋然たる
ものがあるでありませう、而して諸君は從來の
黽勉精勵に依りて普通速記に堪へ得るの域に
到達したでありませう、然れども速記專門家と
して博士學士の間に伍し急板に水を流すが如
き雄辯將又深遠なる學理の講演を些の遺漏な
く縱横自在に速記せんと欲するには尙ほ今後
數ヶ年の努力を繼續しなければなりませぬ、茲
に於てか趣味の養成、時間の愛惜といふ事が必
要になつて來るのであります、如何に努力せよ
勉勵せよと勸むるも趣味を以て事に當らねば
決して努力奮勵を永繼し得るものではない、俗
諺にも好きこそ物の上手なれと言へるにあら
ずや、眞に然りで彼の文章に嗜好を有するもの
は單文隻句と雖も採つて學ぶべきものあれば
直ちに拔抄するか又は腦底に印象して他日の
材に供するではありませんか、されば速記を以
て此生存競爭の激甚なる現代社會に處し身を
立てんと欲するものは須らく寸陰分秒を愛惜

せねばならぬ、殊に獨修者は業務の餘暇零碎の時間を利用して勉學するのでありますから一層切實に其必要を感ずるのであります、然るに世人は往々にして成金黨が一攫千金の利を夢想するが如き謬想を懷き一擧に功を成し遂げんとするものがありますけれども斯くの如きは學術を以て社會に濶歩せんと欲するもの、深く愼まねばならん事であります、何種の職業たるを問はず苟も自已が採つて以て生計の資となすは決して容易の事ではありぬ、現に中等學校卒業者が活社會に出で、果して幾何の報酬を受けつゝあるかを見るに僅々糊口し得るに過ぎないではないか、況んや專門に属する速記を以て身を立てんとするの一朝茶飯事にあらざるは言ふ迄もない事である、現在十九、二十歳の若年にして月々莫大の報酬を受けつゝあるものも皆悉く數年間螢雪の艱苦を嘗め盡したる結果であります、然れば諸君は一日温めて十日冷すが如き亞流を學ばず、速記文字を書き且つ讀むといふ事に趣味を持ち自已の職務を妨げざる範圍に於て夜間と言はず晝間と言はず採て以て學ぶべき閑暇あらば直ちに鉛筆を

執りて綴文と飜釋とを研策練磨するの慣習を作るのが最も肝要であります、這は素より時間の多少を論ずるの必要はない、要は十分間にても五分間にても日々間斷無き勉學を繼續すれば宜しいのである、而して速記なるものは前述の如く一定の文字を傳授したる後は唯だ新聞、雜誌其他の書籍を朗讀して之れが傍聽速記の練習を爲さしむるより外に途はないのでありまして如上朗讀の如きは家人若しくは友人に依賴するも可なるべく必らずしも多大の學費を費して通學するの必要はないのであります、然りと雖も家人又は友人等は自身に取りて何等の興味も利益も無きが爲め最初數日間は卒ざ知らず長日月に亘る時は漸く嫌怠の念を生じて自已が欲する儘の依賴に應せざるに至るのみならず家人又は友人等が已れと繁閑の時を同うせざる等の事情よりして其目的を達し得ざる場合に遭遇する事あるを免れません、故に之れ亦萬全の策とは言ひ得ないのである、而して又競爭者なき爲めに勉强の仕桑へなく動もすれば自暴自棄の弊に陷いる事なきを保し難いのであります、茲に於てか獨修者は各自其

地方の同好、同趣味の良友を語らひて同好朗讀會なるものを組織し相互の餘暇を利用して某所に會會し甲が朗讀の任に當る時は他の乙丙之れを速記練習し又乙の朗讀する時は甲丙之れが速記研磨を爲すといふ風に相互交代に朗讀の責に任じて以て綴文の練熟を期し然る後上述の方法に依つて速記したるものは必らず之れを飜譯して互に其誤謬の点を指摘し訂正し合ひ且つ批評し討究し合ひて相互の知識を交換するといふ事は向上進歩を圖る上に於て最善最良の方法であります、斯くして策勵練磨する時は直接教授を受くると何等の選ぶ所はない、而して速記力は普通の程度即ち十分間二千五六百音位迄は面白い樣に日々進歩致しますけれども、二千五六百音より三千四五百音に至る間は尺進寸退の歩調を辿りて漸次進達するものでありまして前日は非常の進歩に愉快を感ずるも急轉一化、如何に練習に熱中するも更らに進境を見ざるのみか却つて退歩する事がありますが是れ前途の進歩を意味するものにして進境に一の階段を劃するものでありますから更らに一層の勇氣を鼓舞して練磨しな

けれはなりませぬ、要するに速記は進歩しつゝある時は數日間位練習を休止するも些したる影響はないが退歩の時期に於て徒らに志氣を沮喪せしめ練習を休止する時は退歩が遂に眞の退歩を實現し來りて逆戻りするものでありますから克く注意しなければならぬ、然るに修學者の多くは進歩の時期に於てこそ隨分熱心に練習を爲すも退歩の時期となれば嫌惡の念を起して練習を等閑に附するの弊に陷るものでありますが是練習の眞意義を誤解するの甚しきものでありまして不成功に終るの因由となるものであります、而して業務の傍ら二ヶ年の修學を許さざる境遇の人は一ヶ年の通學を許さざる者であります、故に獨修に於て成功し得ざる者は通學に於ても亦成功し得ざるものである、素より學費富豊にして通學の時間充分に存する者は直接教授を受くるに優れるや論なしと雖も余は特に修學者の注意を促したいのである、若し直接教授を受くるに非ざれば充分ならずと思惟せらるゝ諸君は如上、同好朗讀會に於て一ヶ年乃至三ヶ年研究琢磨を積みたる後之が最後の練習即ち俗に謂ふ仕上けとし

事なる策得の直接教授を受くるの間月ヶ三二て
を一日は中者學修多數は尚、置きます、つて斷(さだは)
も早く大道濶歩して見たいなどゝいふ淺墓な
る考よりして自れの技倆如何をも顧慮せず妄
りに就職を急ぐものがありますけれども、之れ
亦自己を賊するの甚だしきものでありまして
自家破滅の基因となるものでありますから斯
かる謬想は速かに一擲せねばならぬ、如何となれば假令何等の困難無く就職し得たりとするも自己の技倆にして完たからざるに於ては事務容易に進捗せざるのみならず誤謬のみ多く甚だしきに至つては何等の要を爲さざる惡果を生み剩へ實務の繁劇は容赦無く事務の進捗を迫り來るを以て遂には之等各方面よりの苦艱壓迫に堪へずして自から筆を擲けて職を退くの已む無きに至り汚名を遺すの奇觀を呈するものであります、此一点よりするも濫りに就職を急ぐの如何に不利不得なるかを推知する事が出來るでありませう、尚ほ如上の覺悟と方法とに依りて速記力の完璧を朝するに遺憾無しと雖も更らに飜譯上遺漏無きを期せんと欲するには普通學の素養を充分ならしめねば

りませぬ、御承知の通り我が國字には「即」「乃」「則」「輒」等の如く之れを音讀する時は齊しく「スナハチ」でありますが各其用所を異にするが如きもの鮮少ならざるを以て速記の練習を爲すと同時に假名遣法、用字法並に熟語の性質等を精研し併せて知名の人名地名等を記臆する事に努め更らに進んで財政と時間とに餘裕あらば諸學科の研究を爲し以て他日の用に供する事を心掛けねばなりませぬ、若し諸子にして之等一切の準備を怠り、中途廢學するが如き事ありとせんか是當に通信教授不可能論者をして詭辯を弄せしむるの俑を作るものである、如何に余が赤誠を披瀝して講述するも修學諸君の努力に俟たざれば其目的は達し得られないのであります、斯るが故に萬一余の講述にして幾分の缺隙ありたりとすれば諸君の熱烈なる努力奬勵に依りて塡充補缺せられ通信教授の可能換言すれば獨修の有効なる事を事實の上に於て證明せられん事を切望の至りに堪へないのである、是れ余が諸君に對する最後の願望であります。

第二十六章　實地の練習

已に一通りの綴文練習を終り普通演說、講話の速記に堪へ得るの素地充分なりと自覺したならば更らに進んで實地に付いて練習するの必要があります、然れども實地の演說、講話等は素より其發音の緩急遲速が自已の注文通りに行くものではありません、時には自已の速記力よりも緩漫なる事あるべく、時には自已速記力よりも急速なる爲め手指徒らに狼狽漂浪して筆尖の紙上に染まざる事もあるでありませうが是れ一に初學者の常として片言隻句も漏さず悉く速記し去らんとするの慾心が却つて心氣をのみ先立たしめて指筆の之れに伴はざる結果に外ならんのであります、故に最初の中は濫りに全部を速記し盡さんとするが如き慾心を起さず自已が飜譯し得べしと信ずる最高速度迄の腕を揮ひ、字体の崩れざる樣留意し脫漏するものは之れを脫漏するに任せて速記し得るだけを速記すれば充分であります、若しも自已速記し悉く速記を話講、說演なる速急も力記速より

盡さんとするが如き慾心を起し字体の崩るゝをも顧みず腕に任せて無暗に書き取る時は走筆の爲めに能力の全部を傾注せざる可からざるを以て演說又は講話の意味を理解するの餘裕無く、爲めに速記後に至りて自已は今如何なる趣旨の演說を速記したるものなるか更らに記臆に存せざるのみならず速記文字は徒らに紛亂錯雜を極めて飜譯し得べくもあらず、假令微々たる記臆を辿りて多少飜譯し得たりとするも亦は區々たる一小部分たるに過ぎず、全体の脈絡を付け演說の趣旨を完全ならしむるが如き事は恰も木に據つて魚を求むると同一轍にして殆んど夢想だに及ばざる事である、斯くの如きは曾に折角心神を傾倒して速記したる勞苦を水泡に期せしむるのみならず延いては字体を紊亂せしむる不良の習慣を助長すると同時に知らず識らず性急の慣癖を作るの害あるのみであります、而して實地の演說は人に依りて發音程度自から異なれるを以て之れを一律する能はずとするも總じて音聲に抑揚高低ありて時に或は休止しつゝありと思へば突然發音し來りて耳朶を驚かす事もあるべく或は

餘り緩漫にして其ダラ〳〵然たる演說振に指
筆の閑を訴へつゝある折しも演者の意氣頓み
に昂り、語調俄かに激し來りて其應戰に狼狽せ
しめらるゝ事もあるでありませう、其實際上に
於ける演說の千態萬狀なる到底朗讀の夫れの
比ではありませぬ、されば朗讀練習中に於ては
割合に成績良好にして大底急速なる朗讀も格
別の脫漏なく容易に速記せられて天晴れ一人
前の速記者となりたるが如く思はるゝもいざ
實地に就て速記する時は却つて平常の技倆に
劣るの惡事を呈する事が往々あります、是れ言
ふ迄も無く自己が常に註文通りの朗讀傍記に
慣れて高低緩急常ならざる實際的演說速記の
經驗に乏しき結果であります、故に實地に付て
は先づ緩漫なる發音の場合に於ては等閑に速
記し去るの弊を防き以て急襲に備へ、又如何に
急激なる發音に遭遇するも周章狼狽する事無
く虛心平氣毫も他の事物に意を介せず精神一
倒演說の趣旨意味を理解記臆するに努むると
同時に何條是れしきの發音速度に敗北して可
なるべきかてふ堅忍不拔の意氣を持して速記
する事を練磨しなければならぬ、不能と思へた

る事に成就したるの例無く不能といふは是れ
素と自から進んで爲し遂げんとするの念慮無
き薄志弱行者流の叫びたる憐愍の音たるに過
ぎず、凡そ事の何たるを問はず不能なるものは
ありませぬ、若し玆に不能なるものありとすれ
ば是れ未だ研究と修練の足らざるに座するの
み、見よ數百年前は殆んと夢想だにせられざり
しX光線の如き或は飛行機の如き又は無線電
信、無線電話等の如きもの發明せられ或は物體
を透視し、或は高空を飛翔し、或は無線にして彼
此の意想を交換し得るにあらずや、之等は皆な
數百年前不可能視せられたるものなりしも幾
多の研究と幾多の修練とを經たる結果遂に今
日の如く可能の現狀を呈するに至りたるもの
である、若し現在の速記文字を以て人間の發音
を書記し得ずとすれば文字の不完備なるに因
るものにして不能といふべきものではない、否
現在の速記文字は已に可能の域に到達し遺憾
なく人間の發音を速記しつゝあるのである、若
し夫れ不能なりと思ふものあらば之れ思ふ者
の罪にして研究修練の足らざる未熟の結果に
外ならんのである、されば他日敏腕なる專門速

記者たらんと欲する修學者は須らく可能なりとの堅き自信を以て練磨せねばなりませぬ、斯くして幾多の經驗を積み孜々として怠らなかつたならば多くの時日を待たずして自から千變萬化限りなき急襲に堪へ得るの意氣を養ひ、指筆克く高低抑揚に隨つて活動するに至れば、茲に始めて完全なる速記者となり得るのである、然れども徒らに散漫乱雜の弊に陷いる樣なことがあつてはならぬ、畢竟するに速記は主なる目的たる飜譯力の程度に隨伴してなさねばなりませぬ、即ち一旦速記したるものは其儘放任するが如き事なく必らず之れを飜譯又は反讀する事が肝要である、而して又飜譯の際には小心翼々如何に微細なる事と雖も輕々に看過せず、注意に注意を加へて若し速記綴文中に讀下し難き個所を生じ又は讀下し得るとするも適當なる文字を當箝むる事能はざる時は其部分を後廻しとなし夫れ以下を飜譯するのである、斯くする時は前後の脈絡關係に依りて容易に判讀し若しくは適當なる文字を發見し得らるゝものであります、要するに速記の飜譯は一小部分の文字に意を注がず全般の文意に心神

を傾倒して判斷飜譯する時は誤謬を免かるゝ事が出來ます、尙ほ飜譯の際に最も深き注意を要するは文字の遣方（ツカヒカタ）であります、元來我が國字には和漢の二樣ありて發音を同ふして字形を異にするものが饒多でありますが速記文字は既述せるが如く字義に依りて其書方を異にするものにあらずして唯だ發音に從つて音聲其儘を直寫するものでありますから深思熟慮克く前後の意味を顧念し、參考せずして無闇に飜譯する時は往々にして意味の通せざる個所を生じ甚だしきに至つては全然反對の意味を爲すが如き奇觀を呈する事が往々あります、故に假名遣ひは勿論一切の熟字に對しては出來得るだけ細心の注意を拂つて苟めにも用字を誤らざらん事を期しなければならん、速記者として最も愼戒すべきは性急と迂濶粗漏の二事で御座いまして、少しく考慮を費せば直ちに判斷し得て誤譯の憾みなかるべきものを性急にして前途を急ぐが爲め思はざる失態を演ずる事がありますから如何なる場合如何なる問題に對しても緻密周到の注意を缺き忽諸に附する樣な事があつてはなりませぬ。

第二十七章　速記と發音

速記の蘊奥を究めざる者換言すれば未だ速記を學ばざる者は速記者が克く急速なる發音を書記しつゝあるを見て以て其快速なるに驚嘆し、斯術の効益偉大なるを賞讃して措かざると同時に速記の可能力は絶大無限のものなりと過信し如何なる言語發音と雖も速記し得るものと考へて居りますが、速記力は決して無限ではありませぬ、即ち其能力は有限であります、尤も在來の算用數字を以て能く其發音を書記し得るに比較すれは如何に急速なる發音と雖も速記し得る道理であります、然れど悲しいかな吾人には簡明なる數字を解し且つ書記し得るが如く複雜繁多なる意想感情の發露たる言語發音を解し且つ書記し得るの能力がないのである、一方に專らなれば從つて他方に忽せとなりて萬全を期する事は至難であります、即ち故意に全速力を以て發音する言語を一言一句も洩さず理解するといふ事は已に至難でありませう、然らば之れに加ふるに書記の作用をもな

さざる可からずと言はゞ其難事たるや自から明かでありませう、故に之れが完璧を期せんと欲せば是非共一点線を以て數音を代表し得べきものとなして聽聞理解の爲めに七分以上の能力を傾注せしめねばならんのであるが斯くの如き事は現在に於ては到底望む可からざる事である、然れども吾人通常の發音を速記するには充分である、然らば其人間通常の發音程度は如何程であるかといふに之れを正確に計るには是非共一定の時間内に發音したる言語を普通の假名文字に現してするより外ありませぬ、然れども和漢兩樣の文字を混用されつゝある今日に於ては其煩瑣其手數到底忍ぶ可からざるものがあります、故に不確定の標準ではありますが一行に對する音數を數へ之れを行數に加算するの方法が一番簡便にして比較的正確の結果を得る事が出來ます、偖て最高發音程度は幾何であるかといふに凡そ一分間四百音位であります、然れども各人其發音に遲速緩急ありて如何なる雄辯家と雖も極めて緩漫なる事があると同時に平常咄辯なりしものも論題に依りては大いに激し急き込んで饒舌る事が

ありますから正確なる發音數を表すが如きは素より求むべくもありませぬ、即ち如何に達辯の人と雖も同一の急速程度を以て長時間演說し得るものではない、彼の能辨家を以て其名を知らるる島田三郎氏の一時間平均率は二万四百音でありまして之を一分間に換算すれば三百四十音でありますから一分間に三百四十音を速記し且つ完全なる飜譯をなし得れば完全なる速記者となれるものと言つて宜しいのであります、而して飜譯に要する時間に付ては之れ亦演者の發音程度、速記者の技倆の巧拙及び智識の深淺、書記の遲速等に依りて大なる等差がありますけれども大抵速記時間の六倍乃至十倍を要するものと見積れば先づ大差がありますまい。即ち十分間速記したるものは一時間乃至一時四十分間を又一時間速記したるものは六時間乃至十時間を要すべき計算になるのであります。

第二十八章　實地上の心得

實地の速記に當る場合には豫め演說講話時間の長短に依りて鉛筆と紙とを充分用意すべきは勿論でありますが其着席の位地は成るべく光線を左方より取る場所を擇ぶのが肝要である、殊に夜間の如きは手暗がりとなるの不便あるのみならず、手影の活動に依りて心氣を散漫迂濶ならしむるの虞れがありますから最も克く注意しなければなりませぬ、又机無き所にて速記する場合には豫め用紙よりも稍大なる板若しくは厚紙を用意し之れを右の膝の上に置きて机に代用するものでありまして携帶に便ならしめんと欲するには板の裏面中央に蝶番ひを附して二ッ折となし開平したる時は更らに表面中央を懸金にて留むる樣に拵へて置けば頗る輕便であります、尙ほ電話速記を爲すには左手にて受話機を持たねばなりませぬから是非共右手にて書記を司ると同時に用紙飜轉の任務をも兼ねゝばなりませぬ、故に此場合には二ッ折りとなしたる用紙の綴り目を左側と

なして竪に置き、之れを右手の母指と中指とに依りて右方より左方に飜轉するの方法を以て最善と致します、而して辭令、和歌等を速記する場合若しくは講談情話等を速記する時には甲乙丙丁といふ樣に幾多の人物が輩出して來ますから彼此混同せぬ樣に如何なる短句と雖も悉く行を換ひて書く事に留意せねばならぬ、若し然くせざる時は飜譯の際其語句の段落を不明瞭ならしめて思はざる失敗を招くものでありますから殊に周到細密なる注意を怠つてはなりませぬ。

第二十九章　補　遺

前章講述せる文字の補遺として二三變則的應用の文字がありますから次に說述致しませう。

補足文字

ヤカ　ヤキ　ヤケ　ヤコ　ヨシ

ハカ　ハキ　ハケ　ハコ

注意　ヨカ、ヨキ、ヨケ、ヨコ及びホカ、ホキ、ホケ、ホコ等は何れも其單線の部分を倍長大にして應用するのである。

□解說　ヤカは正格縮字法に依るヤヤと同一にしてヤキはヤの尾端上方に小環を附しヤケはヤの尾端上方に第四段の縮字を綴合し、ヤコは正格縮字法に依るヤヨと同一方法に依つて連綴せるものである、又ヨシは正体のユと略ぼ同一文字であつて唯だ單線の部分がユよりも倍長大のものであります。

ハカ、ハキ、ハケ、ハコは正格縮字應用に依るハハ、ハヒ、ハヘ、ハホと同一方法に依つて縮綴したるものである、而して當初は是等の補遺文字が正格の縮字法と混同して譯文を誤るなきやを慮憂せらるゝでありませうが少しの習練を積めば文章前後の關係に依り決して錯誤を來す樣な事はありませぬ、假へば「何々汽船は今、東南の方向に向つて進みつゝあり」といふ場合に當り常識ある速記者であるならば如何に曲解するとも方向を方法と誤譯する事なきが如きものであ

る、併しながら是等補足文字は既に詳述せる如く運筆を自由圓滑ならしめんが爲めに作定せるものなるが故に普通の熟語以外地名、人名等を速記する場合には普通の文字又は正格縮字法に從つて應用綴合(尤も地名人名と雖も横濱、横記、箱根、横濱の如く深く自己存在するものは差支ない)する事に注意せねばなりませぬ、而してヤキ(ヨキ)の縮字を書く場合にはヤ及びヨにキの小なるものを連綴する心持にて書けば頗る圓滑に運筆する事が出來ます。

尙ほ終りに臨んで特に注意せねばならぬのは從來修學者の多くが解說及び注意を讀究せずして唯だ文字をのみ見て以て直ちに練磨に取掛ると可成横に書く樣に心掛けよとの意味を極端に解釋應用するの結果連綴の方法を誤るの弊がありますが速記文字は線若くは線に多少の技工を加へて作成せるものなれば多少縱に書き綴字となるのは已むを得ない事である、而して速記文字は變体文字よりも正体文字の方、遙かに優秀のものであるが故に多くの場合正体文字を用ゐて連綴し綴合上甚だしき不便を感ずる場合にのみ限り變体文字を用ゐて正体文字の缺點を補助し以て字劃の正確並に運

筆を輕妙ならしむる事に留意せねばなりませぬ、假へば「地方黨員」と綴合する場合、チ及トの變体を用ゐて綴れば速記面は綺麗に出來ますけれどもチの變体文字はホの牽制に依りてシと變じ又は變体のトはホの惰力とイの牽制に依りて正体ヨの如く灣線になるの嫌あるを以て惡方法と言はねばなりませぬ、之れに反しチ及トの正体文字を用ゐて連綴すれば縱に長き綴字となりて速記面こそ見醜けれトはホの反動に依りて書き得るが故に頗る輕妙自在にして而かも字劃の正確を保ち得る良方法である、即ち速記の本能は滔々發音する言語を輕快に書記し而して其れを誤りなく約束になれる從來の文字に譯記するにあるを以て可成正体文字を用ゐ而して單線と單直線の場合には反對の方向に向つて綴合し尾端に小環又は橢圓環の結合されたる文字に綴合する場合には可成其筆端の趨く方向に綴る事に注意せねばなりませぬ、即ち方針はホに正体のシを綴るも少しも書き惡くゝないから正体を用ゐ、自轉車はシ及びテの正体を用ゐて綴るのである、然れども自轉車の場合にはシにトを綴るのみならば何れ

すまして致し方法を良くを綴るのは頗る不便で書く惡く書くのである、而も書ク（カキ）ニクク綴るも筆右の正確理屈を用ればそれ居注
も正体文字を用ゐて書くのでなく、之を綴つて最も餘五度の劃の屈を綴れば妙体はを
けれども正体のトにシャを綴るトを綴る二十五字の變体を綴つて誤ぬ、つて輕變シ謬
あるからトの變体を用ゐて書くトを綴るから字の變トを且シりに依ら優上
も此場合シの正体に變体のトをカよりもないのみならずトはカ及トの書けが際に字
ないのみならずトはカよりもあるから字劃の變トを書けぬにのば字綴
端の上方に上れるものであるから、然れども屈体文字を用ゐて書くのに引譯ねば文が
を期する点に於ても申分がない、然れども正体のトにシャを綴るのは頗る不便で書く惡く書く牽（ヒク）ニクク綴るも筆右の正確理屈を用ればそれ居注
屈論者は説をなして變体のシ及トの變体を綴つて誤ぬ、つて輕變シ謬
ゐシの筆端を少しく上方に向けて書けが際に優上妙体はを
自（オノツ）からあるトの同一に速かまぬに依ら
にスと見れを以て觀解するれ事が要を
る意

速記學講義　畢

大正三年三月十四日發行
大正三年三月十一日印刷

不許複製

發行所　振替口座東京貳貳壹壹參番
大日本速記學會
東京市下谷區西町貳番地

印刷所　柴合名會社
茨城縣水戸市上市南三ノ九二番地

印刷者　柴謙吉
茨城縣水戸市上市南三ノ九二番地

發行人　宮内市藏
東京市下谷區西町貳番地

著者　松崎平策

定價貳圓參拾錢

大日本速記學會規則(摘要)

第一章　通　則

第一條　本會は一般志學者の爲めに通信教授書たる速記學講義を發行し速記術の普及を圖ると同時に實用に供せしむるを目的とす

第二條　本書を購入したる者には左の特典を與ふ

第二章　質　疑

第三條　本書購讀者は本書中に疑義の点ある場合には自由に質疑するを得

但し質疑せんとする時は頁數並に要点を記載し該質疑用紙に解答の餘白を存し一問毎に別紙を用ゆべし

第四條　質疑の際は必ず往復ハガキ又は返稿料(郵劵參錢)を添へ封皮に『質疑』の二字を朱書すべし

第三章　特　典

第五條　速記術普及の爲め本書購讀方盡力者に對しては其勞に酬ゆる爲め一冊に付き十錢宛の謝禮を爲す

但し紹介購入書は紹介者に直送するものにして本書價額より割引するものとす故に前金郵送の際本書價額より一冊毎に十錢を差引かれたし

第六條　本書は前金又は代金引換にあらざれば一切送本せず

第七條　本書に依る修業者に對しては希望に依り修業證書を授與す

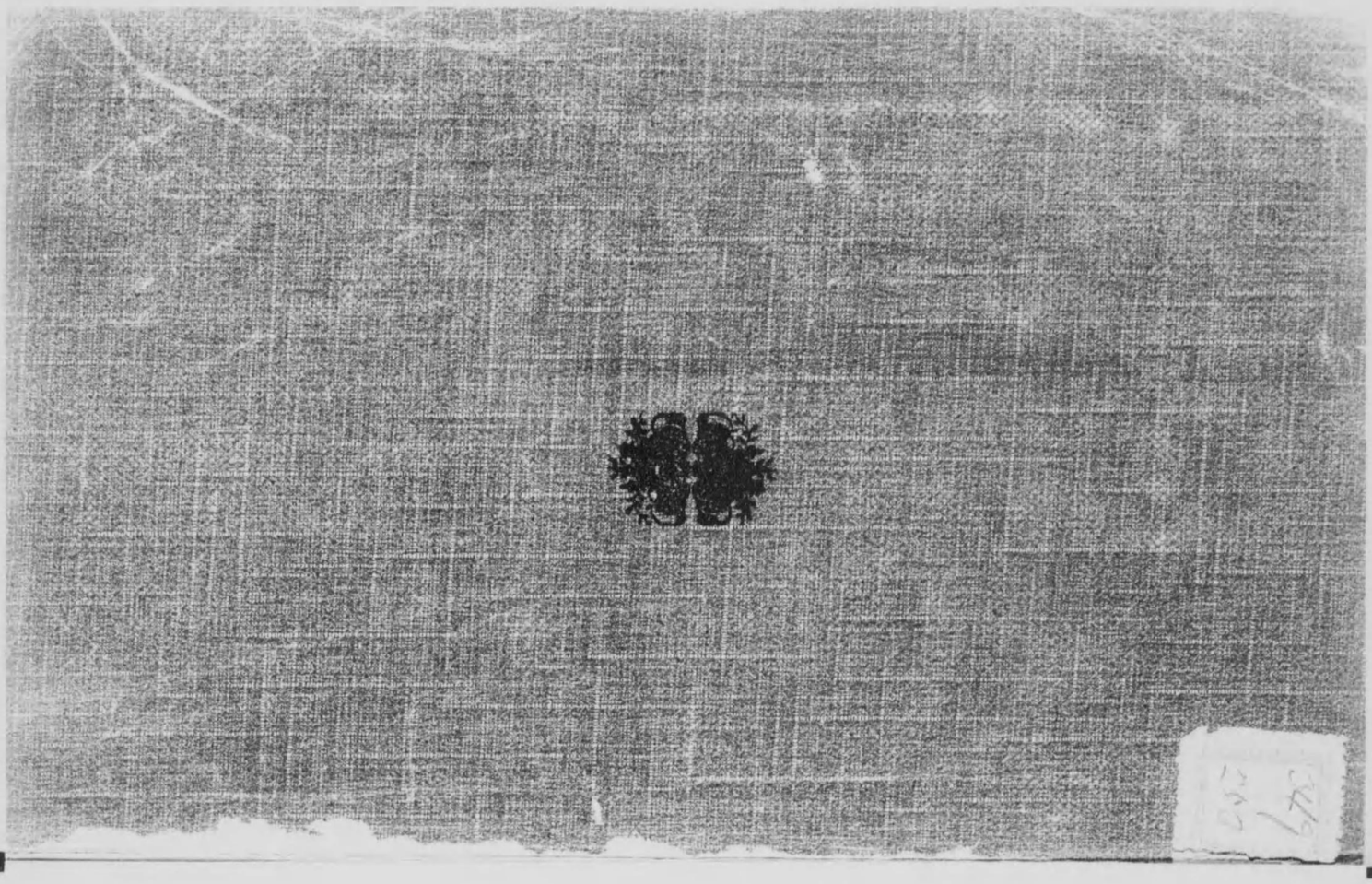
第八條　修業證書を得んとする者は原文及び速記文並に實費として五拾錢を送らるべし

第四章　雜　則

第九條　通信照會には必ず現住所氏名を明瞭に認め『會務擔當員殿』宛差出さるべし

第十條　通信照會の場合には必ず往復ハガキ又は返信料(參錢切手)を入るを要す然らざれば返信せざるものとす

(當分の內實費の場合には水戸市「いはらき」新聞社內松崎平館殿宛差出されたし)



86 98
Ma97

終